

演奏者 ▶ 首席奏者

第1ヴァイオリン

榎本 学
▶ 小島 暁子
佐藤 郁子
中山 典子
林 秀樹
林 昌英
三木 聡一郎
山本 信彦
神馬 義貴 (賛助)
高橋 由紀 (賛助)
高山 佳子 (賛助)
横山 和可子 (賛助)

第2ヴァイオリン

大野 愛
唐木 貴子
川名 美穂
富山 直美
▶ 長島 彩
堀江 英
宮島 史英
山岸 奈緒子
内山 秀文 (賛助)
中島 由恵 (賛助)
浜島 多加志 (賛助)
福井 尚文 (賛助)

ヴィオラ

相川 美佐子
鹿田 澄子
▶ 友末 洋一
内藤 真紀子
二宮 奈緒美
萩原 経
舟曳 千冬
畑中 彩
安田 浩子
村田 実路 (賛助)

チェロ

今井 悠太
▶ 高原 あゆみ
豊田 千織
中谷 泰子
森岡 憲一
岩下 泰久 (賛助)
小倉 嘉朗 (賛助)

コントラバス

▶ 小澤 英輔
小島 大介
鈴木 徹
橋本 由理子
柳町 時敏
柳町 弘毅
山崎 歩

フルート

白崎 哲哉
辻 悠子
▶ 宮本 英俊
山内 久美子

オーボエ

古田島 綾子
▶ 野村 隆浩
藤村 亜子
森永 真実子

クラリネット

▶ 相川 大輔
古西 章子
山本 拓
百元 朝子 (賛助)

ファゴット

二上 義幸
▶ 藤田 高
藤村 伸夫

ホルン

伊藤 正
佐久間 絵理子
柴田 真砂男
西岡 淳
二宮 一敏
▶ 南 朋子
樋口 愛美 (賛助)

トランペット

石林 浩樹
▶ 伊豫田 望
下津佐 綾

トロンボーン

植松 喜孝
関根 一臣
▶ 高橋 正積

チューバ

北岡 寛司 (賛助)

パーカッション

▶ 河竹 千春
近藤 正芳
野村 万季
小林 緑生 (賛助)
富田 奈緒子 (賛助)
森本 太郎 (賛助)

ピアノ

内藤 佳有 (賛助)

運営

団長
コンサートマスター

インスペクター
会計
会場

ライブラリアン
録音

ホームページ・ML
選曲

演奏会

委員長
ステージマネージャー
会計
チケット
プログラム・チラシ
広報 記録・VTR
催事
ステージ
庶務

関根 一臣
大野 愛
小島 暁子
三木 聡一郎
山本 信彦
柴田 真砂男
南 朋子
野村 万季
南 朋子
柴田 真砂男
藤村 伸夫
伊藤 正
関根 一臣
野村 隆浩
野村 万季
藤村 伸夫
植松 喜孝
柳町 弘毅
山本 信彦
藤村 伸夫
高橋 正積

中谷 泰子
本野 正
宮島 史英
柳町 美香
内藤 真紀子
今井 悠太
野村 隆浩
二上 義幸
畑中 彩
安田 浩子

指導者 (50音順)

江口 心一
逸藤 香奈子
齋藤 和志
齋藤 勇二
高山 健児
内藤 佳有
橋本 晋哉
藤村 政芳
(敬称略)

Global Philharmonic Orchestra

グローバル・フィルハーモニック・オーケストラ



第71回 定期演奏会

The 71st Regular Concert

Program

ドミートリイ・ショスタコーヴィチ 交響曲第1番 へ短調 作品10

Dmitri Shostakovich Symphony No.1 in F minor Op.10

ピョートル・チャイコフスキー 交響曲第5番 ホ短調 作品64

Peter Tchaikovsky Symphony No.5 in E minor Op.64

Conductor

キンボー・イシイ

Kimbo Ishii



Global Philharmonic Orchestra

グローバル・フィルハーモニック・オーケストラ

1981年、静岡県オペラ協会が主催するオペラ公演への参加のため結成、「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」などを共演した。1984年以降、シンフォニーオーケストラとして年2回の定期演奏会を中心に活動を行っている。モナコ・フランス、オーストリアと2度の海外公演を行ったほか、ヴァイオリン奏者のJ.J.カントロフ氏やソプラノ歌手の故佐藤しのぶ氏、ホルン奏者のフランク・ロイド氏など多彩なソリストとの共演を果たした。創立40年を過ぎて当初

50名程度だった団員も100名を超える大所帯となり、ある時は古典派の緻密な様式美の再現に取り組み、またある時は近現代作曲家の大曲に果敢に立ち向かうが、奏者と聴衆がともに音楽を愉しめる瞬間を創り出すという精神を忘れることなく、日々の取り組みを続けている。

年齢も職業もさまざまな、個性豊かな団員を擁するアマチュア・オーケストラである。

第72回 定期演奏会 ご案内

2025年1月19日(日) 13:30開演(12:45開場)

[会場] すみだトリフォニーホール 大ホール

[指揮] 森口真司

[曲目] ◆メンデルスゾーン ルイ・プラス序曲

◆ベートーヴェン 交響曲第8番

◆ブラームス 交響曲第2番

[入場料] 2,000円 ※2024年11月1日発売開始予定

[取扱い] トリフォニーホールチケットセンター TEL.03-5608-1212

[問合せ] globalphil.ad@gmail.com <https://www.globalphil.net/>

2024.7.21

12:45開場
13:30開演

すみだトリフォニーホール 大ホール





団長挨拶

本日はご来場頂きまして有難うございます。

今回はロシアを代表する作曲家であるチャイコフスキーとショスタコーヴィチの交響曲をお送りします。チャイコフスキーの5番は作曲家の円熟期に書かれた彼の代表作の一つで、演奏される機会も多いのでご存じの方も多いと思います。一つの主題が全楽章を通して使われる点、短調から始まり最後は華々しく長調で終わる点などベートーヴェンの5番（運命）とも共通点を感じられる名曲です。一方のショスタコーヴィチの1番は二十歳になる前に書かれた曲ですが、通常は交響曲に含まれないピアノを効果的に使用するなど、当時としては画期的な手法で描かれています。初演時の評判がとても良く、作曲家の名前を世に出す役割を果たした佳品です。

指揮は当オーケストラとは20年を超えるお付き合いのキンボーさん。2年前に活動の拠点をドイツから日本に移し、日本のオーケストラを数多く指揮しているので、実演に触れた方もいらっしゃると思います。常に我々に新しい気付きを与え、実力以上の力を引き出してくれています。この原稿を書いている時点では、まだキンボーさんの練習は始まっていませんが、内容の濃い、充実した音楽を皆様にお届けできると信じています。

それでは、最後までごゆっくりお楽しみください。

団長 関根 一臣

Conductor

キンボー・イシイ Kimbo Ishii

幼少期を日本で過ごし、ヴァイオリンを風岡裕氏に学ぶ。12歳で渡欧、ウィーン市立音楽院にてヴァイオリンをワルター・バリリ、ピアノをゲトルッド・クーパセック各氏に師事。

1986年に渡米、ジュリアード音楽院にてドロシー・ディレイ、ヒョー・カン各氏のもとで研鑽を積むが、左手の故障（局所性ジストニア）のためヴァイオリンを断念、指揮に転向する。小松長生、マイケル・チャーリー、小澤征爾の各氏に指揮法を師事。またマネス音楽院にて楽曲分析及び作曲法を学び、当院よりジョージ&エリザベス・グレゴリー賞を受賞する。1993年、1995年のタングルウッド音楽祭に奨学生として参加し、小澤征爾をはじめサイモン・ラトル等に師事。1995年、デンマークで開催されたニコライ・マルコ国際指揮者コンクールで4位に入賞。

ボストン響とニューヨーク・フィルの定期演奏会、及びタングルウッド音楽祭では小澤征爾、サイモン・ラトル、バルナルド・ハイティンク等各氏の副指揮者を務めた。これまでにベルリン・コミッシェ・オーパー首席カペルマイスター、マクデブルグ歌劇場音楽総監督、大阪交響楽団首席客演指揮者、ドイツ・シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州立劇場音楽総監督などを歴任。指揮したオペラには『フィガロの結婚』『後宮からの逃走』『コジ・ファン・トゥッテ』『魔弾の射手』『マクベス』『仮面舞踏会』『ラ・ボエーム』『蝶々夫人』『トスカ』『トゥーランドット』『さまよえるオランダ人』『トリスタンとイゾルデ』『ワルキューレ』『薔薇の騎士』『サロメ』『死の都』『金鶏』『メッシーナの花嫁（ドイツ初演）』などがある。

客演指揮者として、ドレスデン・フィル、ドイツ室内管、アウグスブルク歌劇場管、ボストン響室内管弦楽団、上海響、台湾国家響等を指揮。

日本においては、N響、都響、読響、新日本フィル、名フィル、札響、九響等を指揮。オペラでは、びわ湖ホール・オペラピエンナーレ「フィガロの結婚」、関西二期会「魔弾の射手」を指揮。草津国際音楽祭出演。

2010年、「第9回斎藤秀雄メモリアル基金賞」指揮者部門受賞。

お客さまへのお願い

- ・携帯電話、時計のアラーム等は必ずお切りください。
- ・私語、お荷物を整理する音など、演奏中に物音が出ませんようご配慮ください。
- ・演奏中の入退場はご遠慮ください。
- ・会場内での録画、録音、写真撮影はお断りいたします。
- ・出演者への花束、プレゼントの受付は停止しておりますのでご了承ください。
- ・会場内でのマスク着脱はお客さまのご判断に委ねますが、ブラボーなどの声援をされる場合にはマスクの着用を推奨いたします。

Program Note

1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010	2020	(年)
ロシア帝国 (1721～1917) ↑										ソヴィエト連邦 (1917～1991) ↑					ロシア連邦 (1991～)					
チャイコフスキー (1840～1893) 交響曲第5番 (1888)					ショスタコーヴィチ (1906～1975) 交響曲第1番 (1925)															
江戸 (1603～1868)			明治 (1868～1912)				大正 (1912～1926)	昭和 (1926～1989)					平成 (1989～2019)			令和 (2019～)				

◆交響曲について

交響曲は18世紀中ごろ、ハイドンやモーツァルトらによって確立された曲の形式である。18世紀以前では器楽(楽器の演奏による音楽)はオペラをはじめとする劇の伴奏や、歌の伴奏、貴族などの食事のBGMとしての役割が主流だったが、時代が下るにつれて器楽演奏自体を目的とする演奏会が開かれるようになってきた。交響曲はそんな中で器楽用の音楽の集大成ともいえるべき大規模な形式である。交響曲にはタイトルがついていたり、歌詞がついていたりして音楽の内容を類推できるものもあるが、大多数の交響曲には言葉はなく音楽のみである。

交響曲は基本的には性格の異なる4つの曲(楽章)からなり、第1楽章には「ソナタ形式」が用いられる。ソナタ形式は基本的に次の図の構造から成り立っている。

序奏	提示部		展開部	再現部		終結部
	第1主題	第2主題		第1主題	第2主題	

提示部第1主題は交響曲の中心となるような旋律、第2主題はそれに対し幾分落ち着いた性格を持ち、展開部は幾分不安定な性格を持ち提示部に現れたフレーズ(主題の断片)を様々な形で展開し、再現部で元の主題に回帰する。

ソナタ形式の基本形は変わらないものの、作曲家、交響曲の番号によっても表現される内容はかなり異なっている。

◆ドミートリイ・ショスタコーヴィチ 交響曲第1番 へ短調 作品10

ショスタコーヴィチは1906年9月25日にロシア帝国の首都サンクトペテルブルグに生まれた。音楽に興味はあったものの自分からは習おうとしなかったショスタコーヴィチに両親は1915年にリムスキー＝コルサコフのオペラ「サルタン王の物語」上演に連れていき、ピアノのレッスンを開始した。同年にグリャッセル音楽小学校へ入学し音楽の勉強を始める。1919年にはサンクトペテルブルグ音楽院(当時はレニングラード音楽院)に入学し、ピアノと作曲を本格的に学習し始めた。ピアノは1923年に卒業、作曲は1925年に卒業した。その間、1922年には父親が死去したり自身が病気にかかったりして、映画館でピアノを演奏する仕事をするなど苦労はあったが、作曲の卒業制作として1924年から1925年にかけて交響曲第1番を完成させ、1926年5月12日にニコライ・マリの指揮で初演された。初演は好評で本格的に作曲を続けていく自信となった。なお当時ソヴィエトでは1924年にレーニンが死去しスターリンが最高指導者になっている。1930年代になるとスターリンによる粛清や弾圧は音楽家まで及び、ショスタコーヴィチも批判対象となり活動の阻害を受けることになる。

第1楽章：Allegrettoソナタ形式

序奏はなく、ミュート(弱音器)を付けたトランペットとファゴットによる4拍子の提示部第1主題から始まる。半音階で変容していく不安定な印象を受けるテーマである。その後、類似した性格のマーチのリズムのテーマがクラリネットで演奏され、いったん落ち着くと3拍子になりワルツのような幾分明るめの第2主題がフルートにより演奏される。この時の伴奏は1拍目がなく、2拍目に低音、3拍目に和音がくる形となっており、チャイコフスキー交響曲第5番3楽章と同じである。様々な楽器を引き継いでいったん落ち着くと、4拍子に戻り、12人の弦楽器で始まる展開部にはいる。展開部ではマーチ的なテーマが展開されていく。半音階の上行音型で緊張感のクライマックスで冒頭のトランペットのテーマがトランペット全員により演奏され再現部に突入する。再現部では短く第1主題、マーチテーマが1回ずつ演奏された後すぐ第2主題に移る。終結部では展開部の再現がされた後第1主題に戻り静かに終わる。

第2楽章：Allegro

交響曲では第2楽章にゆったりとした抒情的な曲、第3楽章にメヌエットやスケルツォなどの踊り要素を配置することが多いが、2、3楽章が逆になっているものも存在し、この交響曲第1番も第2楽章に踊り要素の曲が配置されている。幾分ユーモラスな半音階を多用した4拍子の旋律の部分、幾分民族調の雰囲気を持つ3拍子の後再び4拍子に戻る。

第3楽章：Lento

オーボエの悲痛な雰囲気は旋律から始まる。途中金管楽器にファンファーレのようなリズムの旋律が現れ、葬送行進曲のようなテーマをはさみながら最後は長調の和音で穏やかに終始する、と思いきや小太鼓のロールで第4楽章に突入する。

第4楽章：Allegro molto

低音の早い動きのあとすぐテンポが遅くなり木管楽器に不安げな旋律が現れる。いったん静まるがクラリネットから速い半音階の旋律が始まる。ヴァイオリンソロのゆったりとした中間部を挟んで早い旋律が展開されるが突然中断され、第3楽章で現れたファンファーレリズムが現れ中間部のテーマが全奏されさらに加速し決然と終了する。

◆ピョートル・チャイコフスキー 交響曲第5番 ホ短調 作品64

チャイコフスキーは1840年5月7日ウラル地方に生まれた。音楽好きの一家に生まれたため音楽に親しんだりピアノ、声乐、和声学を学んだりしていたが1850年から法律学校に入り、1859年に卒業し、法務省に勤務する。しかし音楽に対する情熱は持ち続け1861年にロシア音楽協会のクラスに入学し、翌年このクラスはサンクトペテルブルグ音楽院に編入される。1863年には法務省を退職し音楽に専念して、1865年に音楽院を卒業した。1866年からモスクワに転居し、新たに創設されたモスクワ音楽院で1878年まで教鞭をとった。この間4つの交響曲、ピアノ協奏曲第1番などを作曲している。1877年に教え子であるミリュコーヴァから求婚され結婚したが2ヶ月で神経を病み自殺未遂の末、逃げるように別居する。音楽院退職後はヨーロッパ周辺を転々としながら作曲も続け、弦楽セレナーデや大序曲「1812年」などを作曲した。1885年からはモスクワ近郊に居を構えロシア音楽協会のモスクワ支部局長に選ばれる。1888年に交響曲第5番が作曲された。

交響曲第5番の特徴は全楽章を通じて「運命のテーマ」といわれる旋律が出てくることである。

第1楽章：Andante – Allegro con anima ソナタ形式

運命のテーマが序奏に出てくる。提示部第1主題はクラリネットファゴットから開始され、第2主題は少し明るく弦楽器で演奏される。展開部を経由し再現部後、終結部でつばやくように終わる。

第2楽章：Andante cantabile, con alcuna licenza

ゆっくりしたテンポの抒情的なホルンのソロから開始される。運命のテーマは中間部の休止前とコーダ前に出てくる。

第3楽章：Valse: Allegro moderato

交響曲には珍しいワルツ。全体的に明るい雰囲気中間部に懐かしい旋律があり再びワルツテーマに戻った後、運命のテーマがコーダに出てくる。

第4楽章：Andante maestoso – Allegro vivace

冒頭から全編にわたって運命のテーマが出てくる。この楽章の運命のテーマははっきりと長調で演奏される。最初は弦楽器によりゆっくりと始まり、ティンパニのロールに続き速いテンポで展開する。終結部前に再びゆっくりなテンポで運命のテーマが鳴り響き、終結部で速いテンポになり1楽章の第1主題が長調で回想され曲を閉じる。

(Fl.宮本)